金沢大学附属図書館「思考の森」企画展ガイドペーパー 2026 年 10 月

『珠洲遊記』を読む：新発見！ 江戸時代の能登旅行記

会期：2026 年 10 月 13 日（火）～11 月 16 日（月）　場所：中央図書館「思考の森」展示コーナー

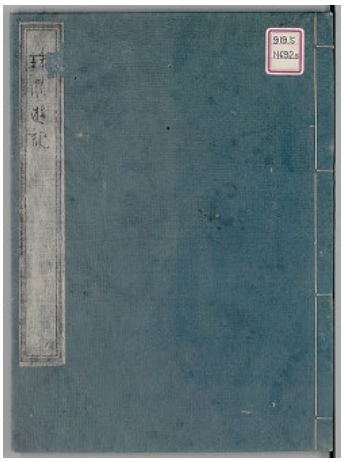
昨年度、附属図書館の蔵書から江戸時代の能登を描いた直筆の旅行記『珠洲遊記』が発見されました。この資料は江戸時代後期の日蓮宗の僧・日亀上人（にっきしょうにん、旅行当時は舟岡山円乗寺（現金沢市河原市町）住職）が能登半島を巡った紀行文です。文章中には、現在まで残る能登各地の地名が多数登場し、日亀上人と各土地の人々との交流や感想なども描かれています。以前から一部で知られていた資料ですが、今回初公開する資料を通じて、江戸時代から現代につながる、能登の自然・人・土地の魅力を再確認してみませんか？

※今回の展示は、令和 7 年度「お宝発見！プロジェクト」支援事業で猪瀬千尋人間社会研究域人文学系准教授が行った調査結果に基づくものです。
https://library.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=38528

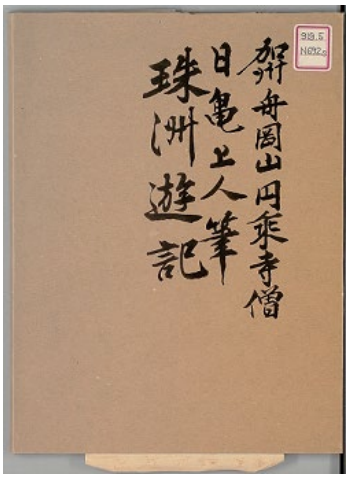
※『珠洲遊記』の全文は、金大図書館時習基金を活用してデジタル撮影を行いました。
金沢大学デジタル・アーカイブ KUDA から全文を閲覧できます。
https://kuda.repo.nii.ac.jp/records/2004240

■「珠洲遊記」とは？

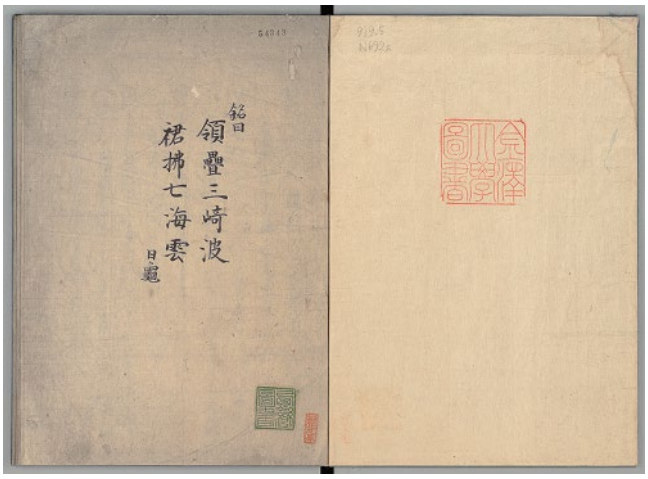
江戸時代後期の日蓮宗の僧・日亀上人による能登紀行文。年不詳の旧暦 9 月に金沢を出発後、外浦から珠洲に至り、内浦を経て七尾になどに滞在、最終的には越中の氷見を経て放生津に至るまでの旅を描いています。文章中には、機具岩など現在まで残る能登各地の景勝地などの地名が多数登場し、往時の能登の繁栄とともに民俗学的にも貴重な事項を伝えています。また、日亀上人と各土地の人々との交流や感想なども紹介されています。



（写真１）表紙



（写真２）帙



（写真３）印記

■由来

この資料には、金沢大学附属図書館の蔵書印に加え、「探花文庫」と「西湾図書」の印が押されています。前者は近 弥二郎（ちか やじろう、金沢の老舗書店「近八書房」5 代目当主）、後者は水上一久（みずかみ いちきゅう、元金沢大学法文学部教授）の蔵書を示すもので、金沢大学は 1977 年に古書店から購入しています。

■日亀上人について

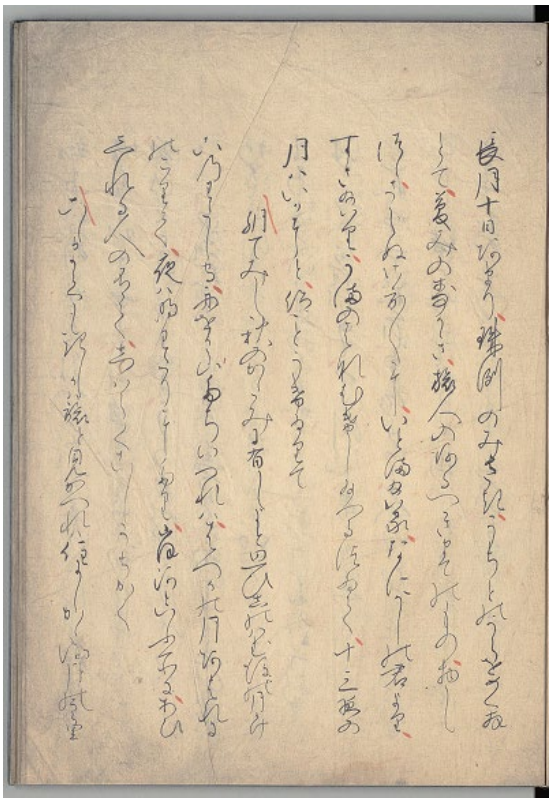
日亀は江戸時代後期、日蓮宗の僧で、旅行当時は舟岡山円乗寺（現金沢市河原市町）の住職。後に京都本満寺四十五世となり、浮木院と称します。1814（文化 11）年の熊本県八代市本成寺の日建上人像賛、1816（文化 13）年の青森県黒石市法峠題目石、年不明の函館市実行寺題目石などにその名が残っています。

■日亀上人がめぐった能登半島

『珠洲遊記』に登場する、日亀上人がめぐったルートや滞留場所は、最終ページの地図のとおりです。今回の特別展では次の場所をピックアップして、原文と翻刻文（整定本文）・現代語訳を対比しながら紹介します。
※丸付き数字は地図と対応しています。

① 出立

年不詳の旧暦 9 月 10 日頃、船岡山円乗寺を出発する際の様子



翻刻（整定本文）

長月（ながつき）十日あまり、珠洲の岬、内外浦（うちとのうら）をめぐるとて、夢みのすがき、旅人のあるべきまでの物ものしつつ、さらぬ御方々にいとま賜はる。なにがしの君より、すさ賜はり、馬の餞（はなむけ）し給へるついで、「十三夜の月はいかに」と仰せごと承りて、

馴れて見し秋のかたみにありし夜と思ひしのばむ後（のち）の月影

この渡守、舟岡山立ち出づれば、二十日の月あはれに残りて、夜は明けわたりにけり。岸河といふ所に、相知れる人の所にて、しばらく腰うち掛く。

こしまえもきしかば旅と見かへれば住吉かかる月の浦里

現代語訳

旧暦九月十日過ぎ、珠洲の岬や内浦・外浦をめぐろうと、旅寝の支度や、旅人として必要なものをあれこれ準備し、普段から親しくしている方々にも暇乞（いとまご）いをした。ある方からは「すさ」をいただき、また旅立ちの餞別（せんべつ）をしてくださった折に、「十三夜の月はどのようであろうか」とのお言葉を承ったので、

――道中、月の光を眺めながら、これは慣れ親しんで眺めた秋の形見、あの時の月夜なのだと思って、懐かしく偲ぶことにしましょう。

さて、この「渡守」が舟を渡すように、舟岡山を立ち出ると、二十日の月が名残惜しげに空に残っていて、やがて夜はすっかり明け渡った。岸河という所で、知り合いの人の家に立ち寄り、しばらく腰を下ろした。

――以前にもここへ来たことがあったので、今こうして旅の身で振り返ってみれば、月のかかるこの浦里は、まことに住みよい所である。

整定本文及び現代語訳：猪瀬千尋（金沢大学人間社会研究域人文学系准教授）

② 妙成寺の版木
お経の版木（現在も残る文化財）と出会う

③ 富来での貝拾い
「楽しくてつい」と言い訳をしながら桜貝、紅葉貝などを拾い集める

④ 天狗の爪
前浜で「天狗の爪（サメの歯の化石の俗称)」を拾う

⑤ 突然の下船
奇勝絶景を船で行くが突然天候が悪くなり、下ろされる

⑥ 深見の夜
土地の老婆に親切にしてもらい感謝。「七浦（しつら）の篝火」を見る

⑦ 輪島のにぎわい
大寺（総持寺）の火災(1806 年)の記述。七ツ島を見る

⑧ 片岩村の老爺
田舎の人たちとの交流。子供に昔話をしようとするが逃げられる

⑨ 川浦海岸で石ひろい
ここでも言い訳をして石拾い

⑩ 珠洲にて
記述は多くありませんが、狼煙、寺家、三崎など現在と同じ地名が登場します

⑪ 人知らぬ九十九湾
松島や象潟を引き合いに出しながら、景色に強く感動

■参考文献

- 猪瀬千尋「新発見の江戸時代・珠洲周遊記について」 ふるさとふれあい講座（2026 年 8 月 22 日開催）配布資料
- 太田敬太郎「三崎の波　僧日亀著　1 冊」(加能越書籍解題(89) 国文学の部(31)) 石川県中央図書館月報 199 号　p.4　1940(昭和 15)年　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1467912/1/3 ※要登録(参照 2026-10-06)



地図作成：猪瀬千尋（金沢大学人間社会研究域人文学系准教授）

■企画・執筆　金沢大学附属図書館　学術情報課貴重資料担当　　E-mail: collection@adm.kanazawa-u.ac.jp